

「**目標を目指してひたすら走る**」 フィリピ 3：12～14

I 導入部

新年あけましておめでとうございます。2019年が始まりました。新年の最初の日曜日、愛する皆さんと共に新年礼拝をささげることができますことを感謝致します。

今年の干支（えと）はイノシシですね。猪突猛進、この一年も、信仰の道のりを走り抜きたいと思います。今年の大河ドラマは「**いだてん**」という題で、オリンピックにまつわる話のようです。主人公の金栗四三（かなぐりしぞう）は、ストックホルム・オリンピックに初めてマラソンで参加した人物です。この大会で、マラソン途中棄権の経験を機に、マラソンに一生を捧げることを決意します。彼は熊本県出身で、ドラマの舞台はわが熊本のようなようです。

彼は、マラソン選手の育成に力を入れます。一度に多くの選手を育てるには、駅伝競走が最適と、駅伝創設を呼びかけます。そして、最初に行われたのが、1920（大正9年）年、四大専門学校対抗駅伝競走で、早稲田大学、慶応大学、明治大学、東京高等師範学校の4校でした。この大会が、現在の箱根駅伝の最初です。

今年、平成最後の箱根駅伝は、三連覇のかかる青山学院でしたが、2位に終わりました。1位は東海大学で、初優勝でした。いろいろなドラマが生まれました。人生をマラソンによくたとえられます。山あり谷ありで何が起こるのかわからない。それがマラソンであり、駅伝です。私たちは、人生の、信仰のマラソン、駅伝を、選手がゴールを目指して走るように、走り抜きたいと思うのです。

今日は、フィリピの信徒への手紙、3章12節から14節を通して、「**目標を目指してひたすら走る**」という題でお話し致します。

II 本論部

一、私たちはイエス様のもの

パウロは、ここでは信仰を走ることに例えています。一コリント9章24節から27節でも、信仰を走者として語っています。パウロの時代、ギリシャのアテネでは、古代オリンピックが行われていたようです。パウロは地上での人生を走ることにたとえています。彼は、賞を得るように走ると言います。金メダル、優勝でしょう。パウロの目的は、目標がはっきりしない走り方はしないということです。この世のスポーツは、朽ちる冠のために努力し、節制するのですが、パウロは朽ちない冠のためにそうするというのです。箱根駅伝では、区間賞の記録更新、大会の記録更新がありました。また、来年、その記録は破られることでしょうか。私たちは、破られることのない朽ちない冠を獲得するのです。

パウロは、フィリピの信徒への手紙3章12節で、「**完全な者**」と言います。この完全なという言葉は、ギリシャ語では、「**テレイオス**」という言葉です。この言葉は、コリントの信徒への手紙第一の2章6節に、「**信仰に成熟した人々**」という言葉がありますが、これも「**テレイオス**」という同じ言葉が使用されています。ですから、「**完全な**」という言葉の意味は、完璧、落ち度がないという意味ではなく、「**信仰に成熟した人々**」なのです。

パウロは、「**自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。**」と言います。彼は、かつてクリスチャンを迫害した張本人でした。多くのキリスト者を苦しめました。クリスチャンを撲滅することが、神様の喜ばれることであると信じて、クリスチャンを捕らえました。彼が、さらにクリスチャンを捕らえるために、ダマスコに行く途中に、復活の主に出会い、打ち砕かれ、イエス様に捕らえられたのです。そして、彼は、クリスチャンの迫害者から、キリストを宣べ伝える人と変えられたのです。

私たちも、イエス様を知らない人生がありました。この世のもの、朽ちる冠を求めて生きて来ました。それも必要な事でしょう。しかし、ある時、私たちも信仰によってイエス・キリスト様を救い主と信じて、クリスチャンになったのです。パウロと同じように、イエス・キリスト様に捕らえられたのです。詳訳聖書では、「**捕らえられた**」という言葉で、「**ご自身のものとされた**」とあります。私たちは、イエス様のものとなったのです。人生を私だけの考えや捉え方ではなく、イエス様と共に、イエス様に導かれ、助けられて歩む人生とされたのです。この1年も、私たちは、イエス様のものとされているのですから、イエス様に全てを委ねて、お任せして、イエス様のお言葉に従いたいと思うのです。

二、前進あるのみ

パウロは、13節で「**なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、**」と言いました。私たちの人生は、過去に捕らわれ、過去に振り回されることがよくあります。パウロ自身も自分の過去に苦しんだと思います。彼は、ステファノという信仰者の死に対して、殺人に対して手を貸した者という傷を持っていました。イエス様に捕らえられて、クリスチャンとなり、福音を伝える者となってからも、この傷は彼を苦しめたことでしょう。彼は言うのです。「**なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、**」と、パウロは罪の赦しを受け、イエス様のものとされ、イエス様に捕らえら、癒され、宣教の使命を持って前を向くのです。

旧約聖書の創世記に出てくるアブラハムの甥ロトの妻は、神様がソドムとゴモラを滅ぼされる時、ソドムの町からロトと妻、娘たちを神様が救い出された時、「**後ろを振り返ってはいけない。**」という神様の言葉に、自分の住んでいたソドムの町が、ゴーゴーと音を立てて滅びる音を聞いて、後ろを振り向いてしまいました。そして、彼女は塩の柱になったと聖書は記しています。せっかく助け出されたのにもかかわらず、自分の家や服や財産などが気になったのでしょうか。残念な結果になってしまったのです。

また、出エジプト記を見ると、モーセを通して、苦しい奴隷状態からエジプトを脱出できたにもかかわらず、イスラエルの民は、水がない、食べ物がない、肉が食べたいと文句を言い、事あるごとに、エジプトにいたら、野菜も肉も、すき焼きも食べられた、といつ

も過去、うしろのものに捕らわれ、モーセの心、神様の心を痛めたのです。

私たちも、現実の苦しみや悲しみのゆえに、過去に捕らわれることがあると思います。過去の成功や祝福が、今よりも優れていて、あの時は良かったと現在の恵みに祝福に立てないで、落ち込んだり、投げやりになっていることはないでしょうか。

また、青葉台教会も昔はよかった。人数もそんなに多くはなく、家族的でよかった、というようなことがあるかも知れません。家族的であるかどうかは、人数ではありません。私たちの心がけ次第だと思います。今は、確かに集会も多く、いろいろと忙しくなりました。静かに礼拝を守りたいというのも大切な事です。ですから、前が良かったと後ろを向くのではなく、神様を知らない多くの人々が、教会の周りにはいるのですから、礼拝を守るだけでもいいですから、他の集会が祝福されるように、私たちの信仰が成熟するように、救われる人々が起こされるように祈りつつ、前を向いていただきたいと思うのです。

三、イエス様が与えて下さる賞を目指して

「世界で一番遅いマラソンの記録」というものがあるそうです。TV東京で、「世界を変える100人の日本人・金栗四三」という題で放映されたそうです。

オリンピックのマラソンで、最も遅い記録が「54年8ヶ月6日5時間32分20秒3」というものです。1912年スウェーデン・ストックホルム大会で、日本の金栗四三が記録したものです。1912年の記録というよりも、1912年から始まった記録と言った方がいいでしょう。金栗四三は、1912年のストックホルム大会開催の前の年、1911年に開催された日本国内予選で、独自に開発したマラソン足袋で、陸王ですね。当時の世界記録を27分も縮める記録を出したのです。当然、次の年に開催されるオリンピックの代表選手に選ばれました。ストックホルム大会のマラソン競技には、19カ国から68人の選手が参加しました。結果は、南アフリカのケネス・マッカーサーという選手が、2時間36分54秒のタイムで金メダルを獲得しました。

日本代表の金栗四三は、日本からの長い船旅の疲れもあり、慣れない食事のため体調管理もあまりできない状態で、競技当日は、会場への車の手配がうまくいかなくて、彼は、会場まで走って行ったというのです。スタートは良かったのですが、あまりの暑さに26キロを超えた所で意識を失い倒れてしまいました。そして、彼が目を覚めたのは翌日で、マラソン競技はすでに終わっていました。普通なら、競技を棄権したということになるのですが、何かの手違いで、棄権の意思が大会本部に伝わらず、競技中に失踪し、行方不明ということになったのです。彼が倒れている所に、近所の農家の人が見つけて介抱していたのです。

あれから55年後の1967年3月、金栗四三のもとに一通の招待状が届きました。スウェーデンのオリンピック委員会からの招待状でした。オリンピック開催55周年の記念式典に出席してほしいという趣旨でした。彼は、記録上は競技中に失踪し、行方不明になっていて、記念行事の準備をしていたオリンピック委員会が、この記録に気が付いて「行方不明」となっていた金栗四三の消息を調べて、彼を記念式典に招いて、ゴールさせたいと願ったのです。

76歳になっていた金栗四三は、記念式典に参加して彼のために用意されていたゴールのテープを切ったのです。ストックホルム・オリンピック委員会は、これをもってストックホルムオリンピックの全ての競技を終了する、と宣言したのです。

金栗四三のマラソンのオリンピック記録、54年8ヶ月6日5時間32分20秒3の記録が破られるということは、おそらくないでしょう。彼は、1912年のマラソン競技では、ゴールできませんでした。しかし、最後には、思いがけない方法で、また別のゴールが用意されていたのです。

私たちの信仰のゴールは、「**神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞**」なのです。イエス様は、私たちの罪の身代わりに十字架にかかり、十字架の上で尊い血を最後の一滴まで流して下さり、命をささげて下さいました。命を捨てて私たちを救って下さり、死んで葬られましたが、三日目によみがえりました。そのことにより、私たちの罪が赦され、魂が救われ、永遠の命が与えられたのです。パウロは、11節で、「**何とかして死者の中からの復活に達したいのです。**」と言っているように、私たちには、永遠の命、天国の望みがゴールにはあるのです。だからこそ、「**目標を目指してひたすら走ることです。**」とパウロは言うのです。この1年、私たちのゴールは決まっています。必ず、神様の恵みが用意されているのですから、イエス様と共に走り抜きたいと思うのです。

Ⅲ 結論部

マラソンは、駅伝は、人生にたとえられることがあります。今年の駅伝でも、あの三連覇のかかる青山学院大学の原監督は、往路（おうろ）の4区で、かつて記録を出した選手よりはるかに、良いタイムの選手を選びました。原監督はタイムにこだわりました。結果は、その4区の選手の走りが、あまりよくなく、それが影響して優勝できませんでした。

私たちの人生においても、数字は大切です。しかし、数字に頼り過ぎで失敗することがあります。人生には、上り坂、下り坂、ま坂があるのです。

私たちの信仰生活においても、立ち止まったり、あるいは、後退したり、倒れてしまうことがあるでしょう。棄権しなければならぬ時もあるのかも知れません。しかし、私たちの信仰の歩みには、イエス・キリスト様が共におられます。そして、私たちが後退したり、倒れたりする時、共におられ、慰め、励まし、時には背負って下さるのです。私たちを愛し、命までささげて下さったイエス様が共におられます。そして、信仰を導いて下さるのです。私たちは、イエス様に捕らえられているのです。イエス様ご自身のものとされているのですから、心配しないで、安心して、イエス様と共に、この週も、この1年も歩んで行こうではありませんか。ゆっくりでもいいのです、時には、休んでもいいのです。目標を目指してひたすら走り抜こうではありませんか。